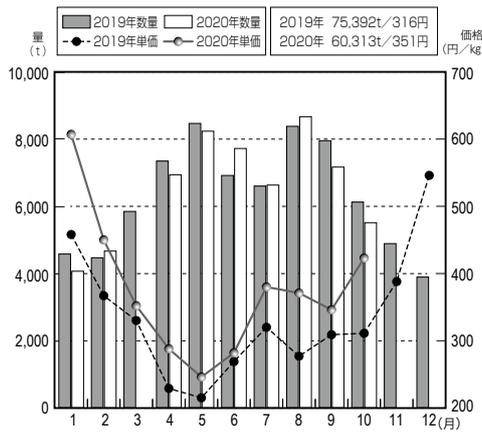


猛暑の8月に 果菜類が受けたダメージ

果菜類の11月は関東産地の終盤であり、東海や西
南暖地に全面的に切り替わるにはまだ早いという端
境期である。生育期の7月は日照不足、一転8月は
記録破りの猛暑で中旬には極端な入荷不足となっ
た。9月にはその後遺症が残り、10月上旬で遅れを
挽回したようにみえた。しかしまた減少に向かい、

単価も高値含み。7月の曇天続きはなんとか乗り越
えたものの、8月の猛暑時に定植されたものを含め
て、シーズン後半は前半のポディーブローが効いて
いる可能性がある。冬春産地にしても、今年よう
な猛暑は想定外。暑さに強いはずの果菜類の生産環
境の、昨今の異常気象を踏まえた見直しが必要だ。

【背景】
要因としては、8月には本番を迎える
はずの東北〜北海道にかけての夏秋野
菜が、とくに日照に敏感な果菜類を中心
に大きく遅れ、キュウリも7月中から強
含みだった相場が8月上旬に弾けたの
である。ただし果菜類は生育が早いハイ
シーズンであり、東北産も下旬に向け遅
れを取り戻して来る。9月も基調は引き
継がれたが、東北産地が減り始め、10月
関東産につながるべき端境期に、関東が
増えず、東北産も終盤で数量なく、単価
は前年4割も高くなった。



【今後の対応】
10、11、12月に入るまで主産地は関東
である。中心産地の埼玉・茨城は8月の
猛暑のダメージが残ってはいるが、10月
は下旬に向けて好天が続いており、生育
は回復した。関東産地には供給に余力が
あり、あまり心配しないが、12月以降の
宮崎・高知など西南暖地の作柄は気にな
る。とくに高知は今年の8月には高温障
害が多発して、周年栽培のミョウガなど
に大きな被害を受けており、冬に入って
の冷え込みいかなでは、不足・高騰の事
態もありうる。

キュウリ

暑さに強いが日照不足と猛暑は敵に
施設園芸も寒さいかなで不足高騰も

【概況】
東京市場では、10月に入ると中
旬に向けて単価が400円を超
えた。7月の日照不足を受けて、
8月上旬には野菜全体の入荷量
が近年になく減少。平均キ口単価も35
0円近くまで高騰したが、下旬には遅れ
ていた分を取り返して、8月全体では昨
年並みに。9月は前年並みだったが数量
は漸減状態で、強気配。10月に入ると遅
れを取り戻し気味に増えたものの、9月
からの強もちあい推移を引き継いで、中
下旬に400円を超えたのだ。

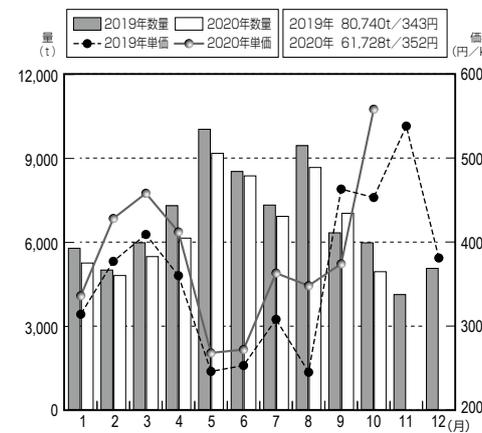
【今後の対応】
10、11、12月に入るまで主産地は関東
である。中心産地の埼玉・茨城は8月の
猛暑のダメージが残ってはいるが、10月
は下旬に向けて好天が続いており、生育
は回復した。関東産地には供給に余力が
あり、あまり心配しないが、12月以降の
宮崎・高知など西南暖地の作柄は気にな
る。とくに高知は今年の8月には高温障
害が多発して、周年栽培のミョウガなど
に大きな被害を受けており、冬に入って
の冷え込みいかなでは、不足・高騰の事
態もありうる。

トマト

夏秋から冬春につなぐ関東産に問題が
年末に向けて熊本に移れば安定確実

【概況】
東京市場では10月に入ってから
減少傾向となり、中旬には前年
の2割減で4割高になった。8月
中旬の高騰時は北海道・東北産地
がほぼ例外なく2〜5割減で、全体では
37%減の5割高という状況に似ている
が、10月の場合は、東北と関東との切り
替わり時期である。夏秋主産地の福島は
切りあがり早く、3割減の3割高、それ
をカバーするために北海道は残量を目
いっぱい出荷し、冬春産地の熊本も早め
のスタートである。

【背景】
夏秋の福島から西の冬春産地に替わ
る時期は、関東産がリレーをつなぐ。ま
ず受け皿になるのが千葉だが、中旬まで
27%も少なく、茨城も34%減と出遅れて
いる。関東では8月の猛暑・高温被害で
全滅した畑もある。他産地に比べて千
葉・茨城のトマト栽培は、ほぼ重装備化
されており、荷口も小さい。基本的に
主産地のスキ間を埋める「補充産地」の
役割であり、関東6県で「集団」供給
体制を形成している感があるが、情報共
有はされていない。



【今後の対応】
圧倒的に冬春の主産地は熊本。11月に
は4割近く、12月には半分が熊本産であ
る。今年の北海道から関東までの夏秋野
菜産地は、7、8月の気象異常に大きく
振り回された。そこに需要面でも「コ
ナ事情」が重なり、需要構造も大きく変
わって、マーケット分析は「三元連立方
程式」を解くようなものになった。トマ
トは人気のある野菜だけに、生産・流通
予想も重要になるが、冬春主産地の熊本
に移行すれば、今年初めての「安定期」
となるはず。

今年の市場相場を読む

日照不足で関東産地が軒並み減少 生産北限を関東から東北に拡大を

ナス

【概況】

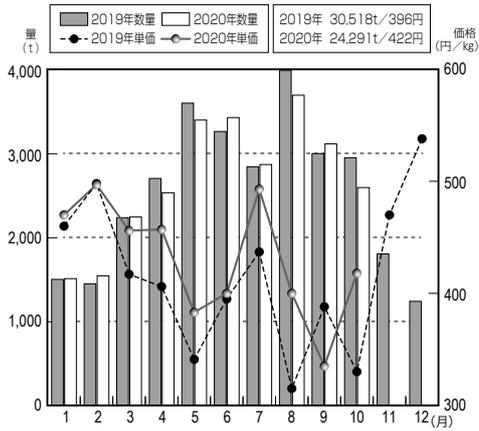
東京市場の10月のナスは、前年より3割近く高くなって推移している。8月上旬の高騰時は、群馬・栃木・埼玉の関東主産県が7月の日照不足からの猛暑影響をモロに受け軒並み半減した。ナス産地は北限が関東で、東北の夏秋野菜にはない。産地の岡山以西では迅速な補完ができない。10月に入ってから、群馬と栃木は残量なく、冬春産地の高知がもはやトップで、茨城が遅れた分を出してきたが、数量は減り気味。

【背景】

ナスは10月に入ると単価高傾向になる。遠隔産地であり計画的出荷で安定性のある高知産の評価が高いからだ。終盤になると安い関東産の残量が今年は少なかったため平均単価が下がらなかった。ナス不足を受けて、昨年より3割近く高くなった。長ナス産地の茨城・熊本・福岡からの入荷が26%も増えたが、ナス相場に引っぱられて単価は2割以上高くなった。果菜類、とくにナスは多少の高温でも元気に生育するが、今年の8月の暑さは特別な高温だったらしい。

【今後の対応】

6～7月の定植・活着期に曇天、日照不足が続くと根張りが貧弱になり、通常でも生育は遅れる。加えて8月は異常高温だった。日照が強く暑くなれば、葉からの蒸散が活発になるが、それに見合う根からの給水ができない場合、最悪、枯死する。北関東のナス専作産地は、もちろん夏場対策に十分なノウハウを持っているはずだが、対応できなかった。地球温暖化が進んでいるのだから、とりあえず福島、岩手、山形などの既存産地拡大は最低必要だろう。



ピーマン

冬春産地につなぐ茨城産の不作 温暖化対応で露地のハウス化を

【概況】

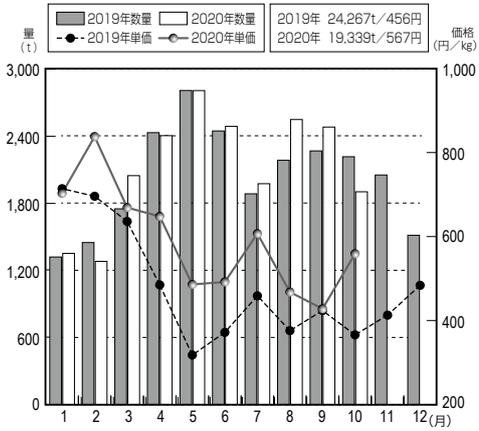
東京市場の10月に入ってからピーマン相場は、中旬に前年23%入荷減の単価がなんと165%の高騰。月を通して53%高だ。8月上旬も、7月の日照不足の影響で同様に23%減で179%高騰だったが、その際は夏秋期にシエアが半数を占める岩手産が大幅に遅れ、春からの産地である茨城の終盤の出荷があつたもののカバースキレなかった。その後、遅れを挽回したが、10月に入ってから入荷減は冬春産地につなぐ茨城の不作による。

【背景】

10月には6割以上を占める主産地である茨城が、8月の猛暑の影響もあって、遅れというよりは不作気味の25%入荷減となった。それを夏秋産地の岩手がフォローしようとしたが、残量が少なかったため対応しきれなかった。一方、冬春産地の高知・宮崎が多少前倒しで入荷してきたものの、品薄感が強く高騰することになった。11月からは、冬場の生産が施設園芸でほぼ完ぺきにコントロールできる高知・宮崎の冬春産地に全面的に転換していく。

【今後の対応】

冬場の産地は遠隔産地であっても、その計画的な供給体制に評価は高いが、8月の異常高温の際、計画供給ができなくなった品目もあったことで、不安感が拭きできない。しかし、施設園芸産地は冬場に絶対の自信を持っている。かえって、関東の残量に期待するより、冬春産地に早めに移行しようというのが需要側の基本姿勢である。産地としても、昨今の温暖化傾向に対応して、果菜類は露地栽培から屋根掛けや無加温ハウスへの転換が望ましい。



流通ジャーナリスト
小林 彰一
青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

※各グラフ右上の2020年入荷量とキロ単価は1～9月までの集計